

「いのちと教育」

和田 修 二

1. いのち軽視の背景

最近の我国の教育界は、凶悪化する少年犯罪や増え続ける不登校児、生徒の学習意欲の低下や学級崩壊等、山積する問題に追われて文字通り「教育大変」な状態である。

これに対して、いわゆる有識者からなる教育の各種審議会と文教当局は、ある時はその原因を画一的な学校教育に求めて「教育の個性化」を勧め、ある時は「ゆとり」が必要だとして教科の削減や「学校五日制」を行い、また道徳教育の一層の充実をめざして「こころの教育」や「いのちの大切さを教える教育」、「奉仕活動」、「総合的な学習」の導入等を次々に学校に要求し、教育現場はその対応で大苦戦である。

しかし、率直に言って、私にはこうした対策は必要ではあるが、それで今日の子どもと教育の問題が早急に改善できるとは思えない。第一、昭和四十六年の中央教育審議会答申に始まり、臨時教育審議会を経て、日本の教育の「抜本的な改革」の必要が強調されてから既に二十年余りとなるが、我国の子どもと教育の状態はこの間ますます悪くなる一方であることから分かるように、子どもだけ、学校だけをよくしようとしても無理であって、私はまず我々大人世代がこれまでの日常生活と考え方を根本的に反省し、改めようとしないうちに、事態の本当の改善は望めないと考えるからである。

言うまでもなく、それは今日の教育の荒廃に学校と教師が責任がないということではない。我々が本当に日本の教育をよくしようと思うなら、教育の改革を子どもと学校だけの問題としてではなく、もっと広く大きな世界歴史

的、文明史的な展望の下に、教育以外の領域の人々とも協力した我々自身の生活の全面的な構造改革、「文化革命」として取組むことが必要だということである。

こう言うで大袈裟に思われるかもしれぬが、これには訳がある。私は第二次大戦が終わった時に中学一年生だった。いわゆる教科書の墨塗りを経験した世代で、以来、日本は敗戦を転機に軍国主義国家主義から平和主義民主主義の国に変わったのだ、二度と戦前の日本に戻ることがあってはならぬと教えられ、またそう教えてきた世代である。しかし、この「戦前の日本と教育を悪、戦後を善」とする戦後の教育界の定説には、重大な盲点があった。それは戦時下の日本、昭和に入ってから日本を、あたかも戦前の日本の全部であったかのように考える一方、戦前とは全く変わったはずの戦後の日本にも、実は戦前と全く変わらない教育の体質が引き継がれていることに、戦後の日本人、わけても教師を含む知識人が全く鈍感であったと思うからである。

その体質とは他でもない。教育を基本的に政治の手段と考える政治主導の教育観、教育学者の村井実のいう「国家中心」の教育と、「政教一体」「政教混一」の教育観である⁽¹⁾。私はこの国家中心政治主導の教育と教育観が、イデオロギー的な保守と革新、体制反体制の立場の違いを越えて、戦後の日本の教育改革と教育学界の主流をなしてきたと考える。この国家中心政治主導の教育は、人間が本来集団^{ポリス}的政治的動物であり、我々にとって最も普遍的にして具体的な集団は、今日でも国家であるという意味で、全く誤りではないのだが、問題は、一つには我国ではその政治が戦前は軍事、戦後は経済に偏重して、この間、文化わけても自国の文化に対する関心が著しく欠落してきたことと、いま一つには政治主導の教育は不随意的に対立する政治勢力との権力闘争、「政争」の具とならざるをえないということである。

こうした個々の人間よりも多数^{マス}としての国民を念頭においた政治主導「政教混一」の教育と教育観は、近代日本の学校教育が明治政府の近代化政策の一環として開始されたこと、そしてその場合の近代化が、専ら欧米をモデルとしてそれに追いつき追いこすことを目指す欧米中心の文化的普遍主義と進歩主義に基づいて進められてきたことに遡ることができる。しかし、この日本の近代化については、我国に近代医学を伝えたペルツが嘆いているように、当初から西洋の技術的成果にのみ関心して、それを生み出した西洋文化の本

質を真剣に学習し対話しようとしなかった⁽²⁾。これは自然科学だけでなく、西洋文化の根底にあるキリスト教との対決を真剣に考えた者が少ないという点で、西洋の思想や制度の吸収に熱心だった我国の人文社会科学関係者についても言えると思う。しかも、この功利的な西洋指向の体質は、日本の敗戦によって戦後に一段と強化されたというのが、私の感想である。

周知のように、戦後我国では、アメリカ占領軍総司令部による国家神道の禁止指令以来、教育界では神道だけでなく、宗教や神話についても、学校で教えたり言及することがタブー視されるようになった。それに拍車をかけたのが、宗教を「民衆のアヘン」視する革新派の人々による反宗教的言説と、日本の歴史や文化について少しでも積極的に語ると、直ちに戦前の国家主義への回帰を指向するものとだて決めつけて攻撃する論壇の風潮であった。このため私の世代以後の日本の教師や知識人の多くは、初めから神道や佛教、儒教を含む日本の文化的伝統に冷淡で、その特質を世界歴史的な展望をもって真剣に研究することがなかったのではないか。ところがボルノーが指摘しているように、我々はもともと自分を理解するように他人を理解する⁽³⁾。ゲーテの言葉を借りれば、「自分の目の中に太陽がなければ太陽を見ることはできない」ので、自国の文化に無知無関心な者は、結局、他国の文化についても皮相浅薄な理解しかできない。そのため戦後の日本の思想界は、ますます文化的な根なし草になって、雑多な外国思想や外国情報の輸入と紹介、応用以上に出ることができなくなってしまった。そして、この我々の内なる精神的空白、本当の自信のなさが一挙に露呈したのが、もはや無条件に追従できる外国モデルがなくなったポスト冷戦以後、バブル経済崩壊後の我国の大人世代、わけても各界のエリートと見なされてきた人々の不祥事の続出と、彼等の目を覆いたくなるような無定見無責任無気力ぶりではなかったか。

したがって私は、今日問題となっている少年達の暴力指向やいのちに対する無関心、心理的・道徳的な混乱は、それに先だって我々大人世代の中に進行していた精神的頹廢の反映であると考ええる。それと言うのも、近代化や近代思想、近代的な生活の底にある基本的に合理主義的で人間中心主義的なものの見方と考え方は、もともと唯一の超越的な神が世界を創造したというキリスト教の信仰をもつ西洋文化の産物であり、この造物主である神に対する信仰を失えば、不随意的に各人の際限のない欲望と利益の追求、目的合理主義

に傾斜し、その結果人間があらゆるものを自己の欲望実現のための手段と見做すことによって、存在するものがそのものとして在ることを否定されること、換言すれば人間の「エゴイズム」と「ニヒリズム」を招来し、最後は力による葛藤の決着、「暴力支配」を生むことになるからである。カミュの小説『異邦人』を地でいくような不条理な近年の少年犯罪の増加は、少年達がこの我々の内なるニヒリズムを直覚しているからであって、私はこの我々の内なるニヒリズムに大人世代が無自覚なことが、今日の我国の教育混沌と深く通底していると思うのである。

2. 迫られている生活の方向転換

教育問題の背景をこのように考えた上で、では今の子どもに「いのちの大切さ」を教えるにはどうしたらよいのか。これが小論の主題であるが、その前にまず「いのち」について考えてみたい。

いのちに当たる英語はlife、ドイツ語はLebenであろう。lifeやLebenは「生」とも訳される。「生」は「死」と対概念である。したがって生が我々にとって何であるか、生の意味は、死の意識との対比において、我々に最も鮮明に自覚される。死は、戦前の日本では家族の病氣や老衰を通じて、子どもでも日常生活の中で身近に実見し、予感することのできる出来事であった。死はそれまでの人間の営みと計画を突然に中断し、無にしてしまうもの、しかも死はいつか必ずおとずれるもの、その意味で最も不条理で抗い難いものである。そのため人類は永い間死を恐れ、死の不安から逃れようとして「魂の不死」や「永遠のいのち」をねがい、わけても宗教に救いを求めてきたのである。しかし、二十世紀後半の文字通り驚異的な科学技術の進歩は、これまでの我々の思考を超える大きな生活の変化をもたらした。今日の日本人は、高度工業化と経済成長の結果、未曾有の豊かで平和な生活を享受している。そこでは病人は病院へ、高齢者は福祉施設に収容され、日常の生活から死を隠蔽するさまざまなものや制度が出来上がり、死は子どもはもとより大人にとっても実感の薄いもの、したがって生のイメージもまた一般に曖昧で希薄なものへと化している。

ひとが生を思うとき、西洋ではこれまでLeibとSeeleとGeistの区別、換言

すれば、生物的な生と心理的社会的な生、超越的な生の三つの次元あるいは位相があることが気づかれてきた。哲学者の上田閑照は、この三つの生をそれぞれ「生命」「人生」「いのち」と呼び分けているが、このうち霊的超越的ないのちに対する人々の関心が著しく低下し欠落するようになったのが現代であり、わけても戦後の日本であろう。

今日の日本は、生物的な生命と物質的な生活に対する人々の関心が著しく肥大して、専ら「延命」とより多くの「財の所有」、大量消費をめざす社会になっている。そして日本の政財界の指導者層は、戦後の高度経済成長以来今日に至るまで、この所有指向大量消費の生活の持続と発展を進歩と考えて、それがもたらす負の副作用、即ち日常生活の断片化と多忙化、ニヒリズムの浸透による人心の荒廃と際限のない環境破壊が、子どもと人類の未来に及ぼす影響に対しては、概して危機感が希薄であったようにみえる。また教育界における「生涯教育」のような新たな教育観の導入や施策にしても、我国では既述のような功利主義的な近代化路線の根本的な反省に基くものではなく、その延長線上での補強策と見做されているように思われるのである。

しかし、こうした所有指向大量消費の生活がこのまま続かぬことは、冷静に見る限り資源問題一つをとっても明らかであって、そこに1970年代から多様な文化をもつ世界人類の共存と地球環境の保全を、国家とイデオロギーをこえて第一に考えようとする新思考と変革運動、いわゆる「シンビオシス共生」への関心と模索が、欧米世界内部から起こったのであった⁽⁴⁾。その結果、西欧や北欧の諸国では、特に環境問題に対する積極的な取組みと規制が一段と強化されているが、こうした変化に対する我国の反応は、今もってまことに鈍いと言わざるをえない。もっとも、「共生」は最近では我国でも流行語となっているが、私にはこの言葉がいかにも軽く使われている気がしてならないのである。何故なら、我々が本当に共生ということを目指すなら、我々は自分の生活態度をこれまでの「所有指向」から、フロムのいう「存在指向」⁽⁵⁾に根本的に向け変えなければならないと思うからである。

ここでいう「存在指向」の生活とは、人間がものや世界を自分の欲するままに利用し改造して生きることを理想とするのではなく、在るものを生かし、自然にものと共にある生活を悦ぶこと、己を無にする、あるいは無になって万物と和して生きることを善しとする。ひとが所有する物財の多さを誇るの

ではなく、乏しいものを十分に活かして善く美しく生きること、真の創造性とところの豊かさをみる生き方である。

このような存在指向の生活ができるためには、我々はまずこの世にあるもので全く無意味無用のものはないということ、一見無意味無用にみえるものも、どこかで何かに役立っており、また役立つことができることを信ずることができなければならない。また、そう信ずることができるためには、ものはみなよくも悪くも今あるままではない、総ては絶えず変わって行くということ。総てが不断に変化するの、ものが我々の把握と理解を超えた形で互いに深く連関し働き合っているからであり、人間だけではなくあらゆるものがいのちをもって係わり合い、全体として絶えず進化していることに気がつかなければならない。そして、そうした宇宙的な万物のつながりとはたらきに目覚めることが、他ならぬ霊的ないのちの自覚、宗教的な覚であり、キリスト教や仏教はこの超越的で宇宙的ないのちのつながりとはたらきを「アガペー」や「慈悲」と呼んで、我々のいのちがそれによって生かされていることを教えようとしてきたのである。この意味で、我々が本当に自他のいのちの大切さ、有難さを知るということは、超越的で宇宙的霊的ないのちの宗教的な覚と不可分であると言わなければならないのである。

3. いのちの教育の実行と要件

このような訳で、我々が子どもにいのちの大切さを教えようと思うなら、我々はまず近代化以来の我々が慣れきった所有指向の生活のもつ人間の自己疎外、構造的ないのち軽視の危険性を、しっかりと直視することが必要である。その上で、対症療法的な道德教育の授業や体験学習だけでは十分でない。少なくとも教師と両親と教育関係者が、日常生活と教育の重心を、「進歩と所有指向」から「共生と存在指向」に、はっきりと転換する必要があると考える。その覚悟がなければ、本当の道德教育、いのちの教育もこころの教育もできない。なぜなら、子どもという人間は、理論や言葉で学ぶのでない。何よりも実際の大人の姿を見て「真似る」ことによって学ぶ人間だからであり、まわりの大人達が本当に変わらぬまま、確たる自分の信念をもたぬままに子どもだけをよくしようとするのは、本質的に不自然で不可能だからである。

では、こうした基本的な立場から実際に子どもにいのちの大切さを教えるために、我々にいかなる配慮が必要か。次に家庭と学校と高齢者のあり方の三点に絞って、その教育の要点と条件を述べてみたい。

(1) まずいのちの大切さを教える教育に当たって第一に注意されなければならないことは、学校におけるいのちの授業に先立って、子どもが家庭の生活の中で実際に「生きている喜び」を体験していなければならないということである。この体験を欠いた者、生きている喜びを感じたことのない者に、後から授業だけ、言葉だけで、いのちの大切さを教えることは至難である。

子どもはいかに小さくても、すでに自ら意思をもち、まわりの人やものの意味を自分なりに探求し、解釈することのできる「人間」である。ただ、子どもは自分の小ささ頼りなさを直覚しており、したがって何よりも自分がひとりぼっちではない、自分がまわりの者から安全に守られている、自分が愛されているという実感を求めている。そして、子どもがまわりの大人の時宜を得た世話を受ける中で、基本的な安心感をもつことができたとき、子どもは外の世界に向かって無邪気に活発な探険の行動を開始する。その過程で、子どもは信頼する大人の行動を模倣しながら、新たな人やものと出会い、その経験を通してものごとの意味と性質を学び、自分に何ができるか、自分が他人から何を期待されているかを、徐々に発見し確認しつつ大きくなるのである。

したがって、通常子どもの最も身近にいる大人である両親と教師は、好むと好まざるとにかかわらず、子どもから自分が人間のモデルにされていることを自覚して、自分の日常生活を一貫性のある揺るぎのないものにするために、自分なりにつきつめた生活の理想、価値観と信仰をもたなければならず、家庭と学校を子どもにとって最も信頼できる生活共同体とすることに特段の努力をしなければならない。その点で高度経済成長以後の我国では、核家族化と少子化が加速し、両親が多忙で不在であったり、家族の団欒と対話を欠く家庭が増えていることは、子どもにとって由々しき問題であると言わなければならない。また、日常生活の高度技術化と電脳化、情報化が進み、メディアを通した子どもの間接体験に比して直接体験が著しく貧弱化しつつある折から、両親は小さいときに子どもをできるだけ単純で自然なものに触

れさせ、子どもに体を使った模倣的反复によって自習自得させるよう配慮すると共に、折にふれて生きることの喜びと悲しみを子どもに伝えることのできる良い絵本や物語を読み聞かせることが大切である。

子どもの教育に当たって我々が陥り易い最も大きな誤りは、子どもを大人よりも劣った幼稚で未開な存在と考えることである。例えば、まだ小さな子どもにとって、世界はものがみな生きていて絶えず変化し、ものの方から語りかけ働きかけてくる「不思議の国」^{ワンダーランド}であると言ってよいが、多くの大人はそれを自他主客の未分化なアニミズムの段階と考えて、子どもをできるだけ早くそこから脱却させ、科学的合理的な思考ができるようにすることが教育だと考えてきた。しかし、早期からの科学主義的な知育の強制は、ファンデンベルクの言うように、却って子どもの豊かな感受性と自由な創造力を滅殺し、自主的な探究心を失わせる惧れがある。他方、子どもがそうしたものや世界との直接的で無邪気な対話と交流の中にいるということは、子どもが大人よりもはるかに「超越的な世界」の近くに住む人間であるということであって、我々はむしろ将来の存在指向の生活と宗教的覚醒の種子として、神様やお化けを含む子どもの空想と遊びの生活を十分に尊重し、保障してやらなければならないのである⁽⁶⁾。

子どもに「生きる喜び」を家庭の中で実感させるためには、子どもを大切に保護し愛するだけでは十分ではない。子どもはこの両親や家族の自分に対する愛に応じて自分も何かをすることができる、自分にも実際に皆に喜んでもらえる仕事があるという経験をする必要がある。この自分はひとりではなく自分には信頼できるなかがいる、自分はこのなかまの信頼に応えて生きていかねばならないし、また実際に生きることができるのだという実感が、換言すれば「信頼性」^{レライアビリティ}と「責任性」^{レスポンシビリティ}と「有能性」^{コンピテンス}⁽⁷⁾が、子どもが人間らしく善く生きようとする力と希望、自信の源である。その意味で、両親は子どもを過保護することなく、面倒でも積極的に両親の仕事に参加させ、折にふれて両親の価値観や信念を子どもに伝えると共に、日常生活の中で規則的に家事を手伝わせるよう心掛けなければならない。

周知のように、近年では若い人々との間に最初から結婚や育児を好まず、子どもを産むか否かは女の自由であるといった主張が、新しいこと進歩的なこととして迎えられているが、こうした発想と思想は、基本的に子どもを大

人の私物視し、子どもの人権を無視するものであり、人間はみな最初は子どもとして生まれ、子どもは積極的に自分を養育しようとする意思と力をもった大人のもとでのみ人間として生育できるという、人間の最も根本的な真実に反するものである。この意味で、我々が改めて子どもを生み子どもを育てるということは、決して人生の瑣事ではなく、人間の尊厳に係る最も根源的創造的な仕事であることを反省し、両親が安心して子育てのできる社会の仕組みを早急に整備することが、総ての大人世代の最も今日にして重要な政治課題であることを自覚しなければならない。

(2) 次に学校教育について言えば、学校は子どもが両親に守られた家庭の生活を離れて、同朋でも遊び友達でもない「級友」という全く新しい他人と一緒に、「授業」というもはや遊びではない「仕事」を与えられ、はじめて我儘の利かぬ「公共の生活」を送るところである。我国の学校は、戦前から戦後の一時期まではまだ地縁血縁の共同体が学校外にもあったために、学校生活の意義と力点は、主として家庭と地域社会だけでは十分にできない「新たな科学的知識」の伝達におかれてきた。しかし、人々の日常生活が高度に工業化都市化情報化した今日では、学校わけても初等学校は、早急に子どもが「最も基本的な知識」を習得し、「公共生活の自覚とマナー」を身につける場所として再考され、再建されなければならない。

こうした学校教育改革のためには、(イ)まず学校が明確で独自の教育理想と教育方針をもつこと、(ロ)この教育理想と散育方針が教師と両親の双方によって選択され、支持されていること、(ハ)学校と学級が比較的小規模で、教師と生徒の対話と理解が十分にできる規模であることが必要である。この条件を充し易いのは、法的な規制の強い公立学校より私立学校であるが、日本の初等学校は殆ど全部公立である一方、日本の私立学校は一般的に言ってこれまで十分な基金をもたぬために、純粋な教育理想の追求よりも、専ら営利的な必要から、上級学校進学のための受験教育を売物にする場合が多かった。これに対して、近年では、これまでの画一的な学校教育に対する反省から、両親による公立学校の選択制や、学校評議会の導入による地域主体の学校づくりの試行が始まっている。しかし、我々日本人にはもともと西洋人のような「公共」の意識が弱い上に、両親を含めた今日の大人世代は豊かさに

慣れて著しく自己中心的利己的になっているため、こうした制度や試行の行方も決して楽観できぬと言わざるをえない。

結局、長い目で見た学校のよさの決め手は、当座の進学率や建物施設の立派さではない。それは、ひとが学校を卒業した後で出会うさまざまな人生の試練に際して、それを思い出すことによって再び人間として生きる勇気を取り戻すことができるような、そのひとのこころの故郷^{ふるさと}となる充実した生活を学校で生徒がすることができたか否かで決まるのである。そのような学校は、たとえ古電車二輛の教室しかなくても、必ず独自の理想と信仰をもつ校長を中心とした生徒と教師の親密な共同生活があった学校であって⁽⁸⁾、我々は現代が価値観が多様化不確実化して人間の相互不信がかつてなく深まった時代であればこそ、そうした確かな理想と信仰を共有する初等学校の設立と両親の学校選択の支援に、特段の関心と努力を払うべきであろう。

また、学校が価値観が多様化し変化が常態化した状況の中で、子どもが人間として生きてゆく為の最も基礎的な知識とマナーを学ぶところとして再生しなければならぬということは、学校と教師がこれまでの国家中心政治依存の体質から脱却して、教師一人一人が自らの生活に即して絶えず人間とは何かを哲学的倫理的に問い続けることができる人間であることが必要である。換言すれば、これからの学校に必要となるのは、教科や児童に関する専門的な知識をもつだけでなく、人間の真実を求めて自ら思索する愛知者^{フィロソフオス}としての教師であるが、この点で現在の我国における教師教育と教師研究は著しく教授技術的な教育に偏って、広く人類の先哲の叡知に学ぶ教師自身の「教養」の支援に殆ど無策無関心であると言わざるをえないのである。

(3) このような訳で、私は先に今日の日本の教育改革には何よりも教育関係者の根本的な生活と意識の変革が必要であることと、我々日本人がことに臨んでとかく身近な人間関係と当面の和に関心して、大局的公共的な判断を誤る傾向があることに鑑み、仏教的な縁起の思想を背景とした「死者と未生の子どもに対する責任の想起」による我々の道徳的教育の再生を主張したのであるが⁽⁹⁾、その際問題となるのが、生涯教育的に見た高齢者の役割の再考である。

言うまでもなく、子どもの最も身近な教育者、責任者は、両親と教師で

ある。いのちの大切さの教育には、既述のように、つきつめると超越的な宇宙的霊的ないのちの自覚が不可欠であるが、この霊的ないのちは、ひとが現世的功利的な関心をもって、生物的社会的文化的な生活に執着している限り、実感することも理解することもできない。この点で両親や教師は、身心ともに最も強健で活動的な青壮年の人間、「現役世代」として、即今の利益社会の権力関係と利害関係に深く関与し、取りこまれて生きているため、子どもの教育に当ってはどうしても不随意的に既成の大人社会の生活と価値観への順応を主眼とした「適応と所有指向の^{インストラクション}教示」に向い易い。

これに対して高齢者は、加齢によって否応なく老化老衰を実感し、死を自分のこととしてはっきりと予感することができる。換言すれば、これまでの人間中心自己中心の所有指向の生活の根本的な限界、空しさを実感できる年齢に達した者であると言ってよい。高齢者はこの自己の死の予感に際して、その不安を紛らわそうとしてこれまで以上に現世的な欲望や生活に執着することもできれば、その逆にこれまでの生活の根源的な空しさを直視することによって、逆説的にそれまで見えなかった超越的な世界を窺る、霊的ないのちものごとの「縁起」に目覚めることもできる。周知のように、プラトンはこのような超越的な世界に向けて根本的な「魂の転回」をなしとげた高齢者に、真の為政者の資格を認めたが、私はこの高齢者の精神的自己変革を支援し、高齢者達を所有指向の生活の根本的な批判者、存在指向の生活と文化の理解者支援者に変えることが、高齢者自身のための成人教育の課題であると同時に、全体としての大人世代の共生指向を激励して、日本の教育改革を側面から支援するための最も重要な生涯教育の課題であると思うのである。

もともと高齢者は、近代化と共に人々の関心が所有指向の生活の合理化に集中するようになると、生産性を失った余生の人間、要介護の弱者と見做されて社会の周辺に隔離されて行く傾向があるが、戦後の日本では、古い家族主義的な価値観の崩壊と急速な核家族化が加わって、教育においても老人と子どもの関係は著しく疎遠なものになってしまった。また、高齢者側も、この間自らがこの所有指向の合理化生活を推進してきたこともあって、その延長線上で高齢者達の自足した棲み分けの生活を指向する傾向があるが、これは異世代共生の観点から好ましいこととは言えない。その意味で今日流行の生涯教育も、各人の「自己実現」を理由にした雑多なニーズの支援ではなく、

共生の時代に向かって各自が何をなし得るか、異世代異業種の人間が生涯にわたって互いに教え合い学び合う「^{めざめ}自覚と創造」の永続教育でなければならないであろう。

ひとは自分の死を覚悟したとき、初めて自分のいのちの文字通りの有難さを知り、生あるものすべてに無差別の愛惜をもつ。祖父母が孫に無条件の愛を感じ、老人が子どもの存在によって深く慰められるのは、そこにいのちの輝きと再生を直覚するからである。子どももまた、そうした老人の存在と無条件の愛に包まれることで深く安堵すると共に、その老人の死を通して、愛することと別れることの悲しみを学ぶのであり、この幼い時の「愛」と「悲しみ」の経験が種子となって、子どもの中に他生に対する「^{コンパッション}共感と同情」、いのちへの「畏敬」の心を育てるのである。

おわりに

現在、いのちの大切さを教えるために、学校で生徒にニワトリを実際に殺して食べさせた実践の可否をめぐって、教育関係者の間で熱心な論議が行われている。「総合的な学習」に対する期待が高まっている折から、今後ますますこの種の教授学的な工夫と論議が活発になるのはよいことであるが、同時に我々は、学校における体験学習がいかに周到に計画されても実生活における本物の経験には及ばぬこと、いのちの教育は学校の授業だけでなく学校外の生活と教師以外の大人世代の協力が不可欠であることを忘れてはならない。この点で特に注目されなければならないのが、今日の高齢者世代の動向である。高齢者は、他の世代の人間にとっては自分の知らぬ過去を代表する人間であり、また不随意的に自分の行く末を想像させる者である。ひとは老人の姿を通して「過去」と出会い、自分の「将来」を予想して、現在の自分を反省し、自分の本当の課題が何であるかを自覚することができる。その意味で、今日の高齢者世代がいつまでも現役時代に執着して時勢に遅れまいと足掻くのではなく、老いを正受して所有指向の生活の根本的な限界と存在指向の生活の善さを知る人間として再生すること、何よりも「死者と未生の子どもに対する愛と責任」から今日の政治と教育を根本的批判的に見直すことのできる者として日常生活の中ではっきりと他の世代の前に現れることは、

今日的に極めて大きな社会的教育的な意義をもつと言わなければならない。
いのちの大切さを教える教育が、子どもだけの教育問題ではなく、人間の生涯を展望した大人世代の自覚と創造のための自己教育、永続的な相互学習の問題として再考されなければならない所以である。

(本稿は平成14年度関西教育学会第54回大会シンポジウムで発表した要旨に加筆したものである)

[注]

- (1) 村井実『教育の理想』慶應大学出版部、2002年
- (2) トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳『ベルツの日記』(上・下) 岩波文庫、1979年
- (3) O.F.ボルノー、小笠原道雄、田代尚弘訳『理解するということ』以文社、1978年
- (4) M.ファーガソン、堺屋太一監訳『アクエリアン革命』実業之日本社、1981年
- (5) E.フロム、佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊国屋書店、1977年
- (6) 河合隼雄編『子どもと生きる』創元社、2001年
- (7) M.J.ランゲフェルド、和田修二監訳『よるべなき両親』玉川大学出版部、1996年
- (8) 黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社、1981年
- (9) 和田修二『教育の本道』玉川大学出版部、2002年

